綴葉 ていよう

'25 8 9

No. 440

あなたが創る生協の書評誌

話題の本棚

南田偵一編『ドキュメンタリー詩誌 詩あ 01』

笠井潔著『夜と霧の誘拐』

特集／戦後を生きる

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町　吉田南生協会館２階
Tel:771-6211 ／ E-mail:ku-teiyo@univ.coop
綴葉HP:http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/

univ. CO-OP 京大生協 綴葉編集委員会

もっと気軽に詩誌を手に――新たな商業詩誌の誕生

ドキュメンタリー詩誌 詩あ 01

南田偵一編

パブリック・ブレイン

新たな商業詩誌が創刊された。その名も「詩あ」。一風変わった名前だが、誌名の由来は「詩はあらゆる言葉の前に存在する」ということらしい。五十音の先頭に位置する「あ」よりも「詩」は前に存在している――それを表現したのが「詩あ」ということだ。不思議な語感だが、どことなく軽さとユーモアが感じられ、心惹かれる。

＊

先に「新たな商業詩誌」と書いたが、本誌の創刊者・南田偵一がこだわるのは「同人誌」ではなく「商業詩誌」という位置づけ。これまで詩に触れてこなかった人たちに現代詩の魅力を伝えたい。そのためには全国の書店に本誌を流通させないといけない。そうした思いから、南田は本誌を「商業詩誌」として創刊した。

現在流通している商業詩誌には『現代詩手帖』や『詩と思想』があるが、「現代詩は難しい」というイメージもあって、これらの詩誌には難解な印象が付きまとう。そこで「詩あ」が目指すのは「普段『現代詩手帖』や『詩と思想』が難しいという方の導入」となること。だから南田は言う。「慣れてきたら、『現代詩手帖』や『詩と思想』を読んでほしい」と。現代詩の間口を広げるこうした試みは、詩の世界が縮小する現在、じつに歓迎すべきものではないか。

本誌の冒頭には八人の詩人による詩が掲載されている。とくに印象に残ったのは石松佳の「波」。第一連の冒頭四行を引用する。

あれは、波だ
子どもたちが　あなたの目の前に現れ
でも　やがて蜃気楼になる
彼らの服は燃えやすい

第二連には次のような詩句が続く。「肉にはかすかな匂いがすることとか　水面に触れたら　心音ではなく／精神の金属音がすることなどを　あなたに話したことがあり／興味のないあなたは　晴れた空に向かって　傘を差したりもする」。たしかに「わかりやすい」詩ではない。しかしイメージとイメージの必然的なつながりがここには感じられる。本誌には、詩人・松下育男へのインタビューが掲載されているが、そこでは次のように語られる。「これまでまったく詩を読んでこなくて、石松さんの詩を読んだときに『すばらしい詩だ』と感じる人がいたなら、ぜひその人には詩を書いてほしいと思います」。では、あなたはどうだっただろうか。

＊

本誌には、特集「現代詩をはじめよう」として、詩の教室・講座に関するエッセイやレポートも掲載されている。詩に興味はあるけれど……という人にとって、詩の教室・講座への手引きは非常にありがたい。本誌が詩の世界を広げてくれることを願って。（ぱや）

（一一二頁　税込一一〇〇円　5月刊）

誘拐と殺人、あるいはアーレントとの対話

夜と霧の誘拐

笠井潔著
講談社

七〇年代のフランスを舞台に、哲学徒ナディアとその友人カケルが数々の難事件に挑む〈矢吹駆〉シリーズ――思想家にして小説家でもある笠井潔のライフワーク、本書はその第八弾だ。シリーズはこれまで〝密室〟や〝孤島〟といった探偵小説お馴染みのテーマに取り組んできた。今回のテーマは、ずばり〝誘拐〟である。

◆交換の犯罪、交換される犯罪

犯人が人質を取り、身代金を要求する――そんな〝誘拐〟の構図に、小説はこれでもかと捻りを加える。被害者は間違われ、裏ではもうひとつの誘拐が進行し、挙句には同日に発生した殺人事件とも関連があり……。実のところ一連の〝犯人〟は早々に明らかになるのだが、謎が深まるのはむしろそこからだ。事件の全容が見えてくるほどに、犯罪の錯綜した構造が顕わになる。読者はこの深い霧のなかで〝何が起こっているのか?〟とさまようことになるだろう。

とりわけその複雑さを生んでいるのは幾重もの〝交換〟の図式だ。そもそもが交換の犯罪である誘拐について、本書では人質や身代金、あるいは事件そのものまでも交換される。そしてカケルが最後に解き明かす真相もまた、交換が鍵となるのだ。複雑な事件がある交換によってぐるりと反転する驚きは、本書の大きな見どころだろう。

しかし、本書にはもうひとつの重要な見どころがある。シリーズのお約束――実在の哲学者との〝思想対決〟だ。

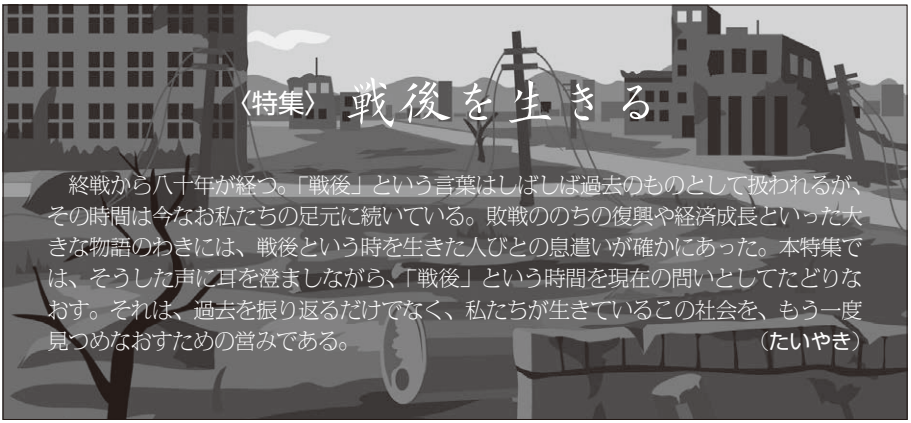
◆誘拐されたユダヤ人の問題

これまでも笠井潔は作中に、実在の哲学者を登場させてきた。一応は仮名を与えられているものの、思想も著作もハイデガーやフーコーそのものである彼らは、作中でカケルと思想的に対立し、論争を交わす。今回その相手となるのは、ハンナ・アーレント（作中ではハンナ・カウフマン）だ。彼女とカケルはときに物語の進行を中断してまで議論を戦わせる。革命について。悪について。そして、誘拐されてしまった六百万人のユダヤ人――その大量虐殺と、裏面にあるシオニズムについて。

しかしこれらの論争は決して、本篇に対するわき道ではない。誘拐事件に巻き込まれるのは強制収容所を生き残ったユダヤ人の一族であり、殺人事件の背景にも虐殺の歴史が絡んでくる。カウフマンとカケルの思想対決はむしろ小説の中心にあるのだ。そして終章において事件の解決は、パレスチナ問題をめぐる議論へと接続される。カケルは云う――《ナチによる大量殺害の起点にはユダヤ人の追放と難民化が存在したように、イスラエルによるパレスチナ人の追放と難民化は、ユダヤ人を加害者とする新たな虐殺と絶滅の未来を予示しているのでは》。カケルがカウフマンに投げかける問いは、そのまま思想家・笠井潔からアーレントに対する時を超えた問いかけにもなっている。本書は優れた探偵小説であると同時に、今日的なテーマを扱った思想書でもあるのだ。

（水炊き）

（六七二頁　税込三四一〇円　4月刊）



〈特集〉戦後を生きる

終戦から八十年が経つ。「戦後」という言葉はしばしば過去のものとして扱われるが、その時間は今なお私たちの足元に続いている。敗戦ののちの復興や経済成長といった大きな物語のわきには、戦後という時を生きた人びとの息遣いが確かにあった。本特集では、そうした声に耳を澄ましながら、「戦後」という時間を現在の問いとしてたどりなおす。それは、過去を振り返るだけでなく、私たちが生きているこの社会を、もう一度見つめなおすための営みである。

（たいやき）

少女たちの生きた戦後

「何のために勉強するのですか？」

と先生は言われた。皆は黙っていた。すると、先生はこう言われた。

「皆さんは、じきに死ぬかもしれませんね。爆弾が落ちてくれば、そうなりそうですね」

河野多恵子が記した戦争の記憶。これを含む『**少女たちの戦争**』（**中央公論新社**）には、太平洋戦争の時代を少女として過ごした二七名によるエッセイがまとめられている。右の引用には続きがある。黙り込む女子学生らを前に先生は言葉を続けた、「いつ死んでもいいように勉強するという気持でいてください。……ほんの僅なことで、少しでも豊かな心を養うようにしてください。でも、授業中に眠ければ、眠ってくださっていいのですよ」と。津村節子はこう綴る――物心がつく頃には満州事変、やがて日中戦争、太平洋戦争へと進み「軍国主義の教育が、真っ白な頭の中にたたき込まれていて、反戦思想など芽生える隙もなかった」と。向田邦子は夜間の空襲で生まれて初めて土足で畳の上を歩いた後ろめたさを。田辺聖子は防空壕で友と小説について語り合ったことを。

このような話を少女たち自ら語る機会はあまりない。勤労動員と空襲、この狭間にある少女たちの日常が本書からは垣間見える。彼女たちは確かに戦争の当事者である。だが、同じ年頃の男子が兵隊として動員される中、空襲のその瞬間まで少女たちの日常は意外なほど静かに粛々と進んでいた。

そして、敗戦。「さまざまな価値がでんぐりかえっ」たと茨木のり子は記す。

一九四五年一二月、婦人の参政権が認められる。翌年発布された新しい憲法には、両性平等の条項が加わった。この背景については『**１９４５年のクリスマス**』（**朝日文庫**）が詳しい。幼少期を日本で過ごし、米国留学中に開戦、終戦直後にＧＨＱ職員として来日した女性、ベアテ・シロタ・ゴードン。本書は彼女の自伝である。当時二二歳の彼女が、新憲法の草案に女性の権利を書いたのだ。少女時代にその目で見た日本の女性たちの姿に思いを馳せ、彼女らを幸せにしたい一心で作案した。「後で日本の女性たちが苦労することが

ないように」と。

そうして理念は手に入れた。これまで法的に「無能力者」であった女性たち、戦時中も粛々と生活し続けた少女たちは一人の人間としての権利を得た。だが、連綿と続く社会とそこに生きる人々の意識は敗戦を境にして切り替わるような簡単なものではなかった。

『**田辺聖子　十八歳の日の記録**』（**文藝春秋**）には、作家・田辺聖子が書いた昭和二〇年四月から二二年三月までの日記が収録されている。一九四五年八月一七日、玉音放送から二日後の記録には校長の発言が残る。曰く、女子の教育は戦争で男子を取られていたから女子が後を継いでいたのであって、これからは「女子は元のように家庭へ帰るべきである」。作家を目指し大学進学を希望していた彼女も、当然それを諦め弟に譲っている。日記には学問への意欲が溢れている。それだけに卒業式前日の記録はやるせない。「仕方がないとあきらめてはいるものの、私だってもっと学問がしたくて、泣けてくる」。

『**ひとり暮しの戦後史―戦中世代の婦人たち―**』（**岩波新書**）は、戦後三〇年、一九七五年時点の状況を記述している。本書が対象とするのは戦後を独身の身で生き抜いた女性たち。終戦直後、負傷した家族の介護や家長の不在、なにより戦争が多くの若年男性の命を奪ったことにより、結婚という選択肢が存在しなかった女性たちがいた。こうした戦争が生んだ独身女性は、戦争未亡人とは異なり、社会において少数派であり、制度からは黙殺された。良妻賢母教育、軍国主義教育の時代に少女期を過ごした彼女らは、戦後突然に自立を求められることとなる。

インタビューからなる本書はその生活の困難を伝える。養われるものとされている女性は賃金が家計補助程度に据え置かれ、昇進の機会にも恵まれない。定年も早い。すると賃金と勤続年数から計算される年金は当然低くなる。なんとか生き抜いた女性たちも来る老後は厳しい。平等に保障されるべき一人で生きるという権利。少数派の現実は未だ残る不平等を色濃く示す。それでも彼女らは自立し、生活を続けた。そこから半世紀、社会は今どれだけよくなっただろうか。

（ひるね）

混血児――戦争が終わって生まれた苦悩

ビジネス街として知られる新橋や有楽町、高級ブランドショップが立ち並ぶ銀座。その一角に、碧眼や縮れた髪を持つ、元敵国兵士と日本人の間にできた子ども――混血児が毎日のように捨てられていた時代がある。

混血児の中には、産みの親に殺された子どもも多い。しかし、生き延びた子どもたちもまた苦境の連続であった。日本政府は敵国であった米兵の血を忌避し、米国政府および軍も敗戦国かつ差別対象であった日本人の血の混ざった子を良く思っていなかったため、混血児を救済する制度はなかった。このような混血児に「居場所」を作った日本人がいる――沢田美喜だ。神奈川県大磯に混血児の居場所となるエリザベス・サンダース・ホームを作った彼女について、『**ＧＨＱと戦った女沢田美喜**』（新潮社）は詳しく描いている。

本書では、手記の引用やホームで働いていた人に沢田についての話を聞くことにより、その等身大の姿を描き出す。「ママちゃま」と呼ばれていた彼女は、三菱財閥の創始者の孫あった。その活動は、上流階級の人であったからこそできた活動であることには違いない。しかし、そもそもこの時代に混血児に差別的な目を向けずに手を差し伸べようとした稀有な考え方を持つ人だった。自身も自分の子どもと食事をとる暇もないくらい、多方面で積極的に動いていたという。彼女が混血児のために作ったホームは、初めは乳児だけを受け入れていた。そして彼らを育てるうちに、

地元の学校では混血児を受け入れていないということを知った。そこで、混血児が差別の目を向けられることのない、現在のインクルーシブ教育の先駆けとなる教育機関「聖ステパノ学園」を一九五三年に設立した。

このステパノ学園の教育方針は、時代の変遷とともに変化していく。これを分析しているのが『**「混血児」の戦後史**』（青弓社）である。戦争によって生み出された〈弱者〉＝周縁化された人々に対して、世間という名の〈強者〉がどのような目を向け、これに対して政策を打ち出してきたのか。そして、〈弱者〉がどのように生きづらい社会で生きたのか。〈弱者〉の一例としての混血児について叙述している。

「聖ステパノ学園においては、その創設された経緯から、六十年以上、常に差別的態度と戦い、子どもの心の教育を大切にしてきました」。一九八〇年の沢田の死後も変革が続けられ、現在まで続くステパノ学園の教育方針については、教育や差別について興味のある人にも一読の価値がある。設立当初は、自治と協働に力を入れ、近隣コミュニティを中心に混血児に対して向けられる視線を変えることに注力した。そして、卒業生が技術職に就けるように、様々な形で技術教育を行った。一九七〇年代には知的障がいを持つ子どもや親のいない子どもの受け入れをはじめ、障がいなどの能力ごとにクラスを区別することで、弱者（混血児）が強者（ハンデのある日本人）を支えるという、社会とは反転した構造を構築した。一九九〇年代にはインクルーシブ教育の在り方が世界で議論され始めたことや、通学生の受け入れを始めたことから、この体制を廃止。以降、「すべてを受け入れ」、「排除しない」方針でのインクルーシブ教育を展開している。

沢田は、日本以外でも混血児が幸せに生きていく環境を追求する手段の一つとして、ブラジルへの移住やアメリカへの養子縁組も積極的に行っていた。例えば、幼いころにホームに預けられたヨシアキは、十一歳でアメリカに渡った。そして、スポーツが得意で、地元のプロチームにもスカウトされていたヨシアキは、〝アメリカ人として〟の自身を追求するために、米国軍隊に入隊する。そして、二十二歳の若さでベトナム戦争に従軍し、亡くなるのである。

『**ヨシアキは戦争で生まれ戦争で死んだ**』（講談社文庫）。たしかにこの書名を体現するような、戦争に振り回された人生だった。彼の死から九年後にその事実を知ったヨシアキの実母は、四十四年ぶりに彼と墓前で対面を果たす。彼女がなぜわが子を手放さざるを得なかったのか。手放した後、どのように生きてきたのか。様々な側面から混血児のリアルを知ることができる一冊である。

現在、戦後の文脈で「混血児」と差別を受ける人はほとんどいないだろう。しかし、その存在は、現在に至ってもインクルーシブ教育などの側面で、その発展過程において、我々に影響を与え続けている。　（**プラチ**）

むき出しの焦土から都市を建てた人びと

広島は「廃墟から立ち上がった都市」として語られてきた。かつて焦土と化した地は整備され「平和都市」の名のもとに希望の物語が編まれていく。だがその物語は、語られなかった声や失われた風景の上に築かれてはいないだろうか。たしかに、一九四五年八月六日、広島の地は一変した。しかしその破壊は時間を断絶させるものではなかった。むしろその破壊は、すでにそこにあった歴史と生活の上に重なり、避けがたく土地と身体に刻みつけられたものだ。復興とは新しい出発ではなく、傷ついた身体と壊れた街のなかで、な

お生を立て直そうとする営みだった。

被爆から八〇年。気鋭の研究者たちの仕事は、語りの背後に沈んでいた空間や身体に目を凝らし、「復興」が何を切り捨て、何を押しつけたのかを問い直している。整地され、記念碑に置き換えられたその場所に、かつて確かに存在した人びとの声と動きを取り戻すことで、直線的な時間の流れはほころびを見せる。そこにあったのは、破壊のただなかを通して続いていた生活だったのだ。

戦災復興土地区画整理事業という巨大な制度のもと、広島の都市空間は「平和都市」として再編されていった。だがその背後では、地図に描かれない無数の軋みが生じていた。『**広島　復興の戦後史**』（**人文書院**）で歴史学者の西井麻里奈が掘り起こすのは、そうした制度の周縁で交錯した「声」の複雑な編成である。行政文書や住民の陳情書に丹念に目を凝らすことで、西井は「復興」がどのように人びとの生活を翻弄し、その痕跡を都市空間から消し去っていったのかを描き出す。

象徴的なのが、現在の平和記念公園の建設をめぐる中島地区の立退きである。『この世界の片隅に』の舞台としても知られるこの地域には、被爆後の十年間たしかに人びとの暮らしがあった。平和公園の建設予定地とされた中島地区は、市内各地ではじまった区画整理に家を追われた人びとの避難所となっていた。陳情書には「商いの場として動くわけにはいかない」といった切実な声が並ぶが、市当局は「世界注視の中」での都市建設を優先し、強制的な立退きが実行された。

「人びとが生きて住むために、苦難を訴え、時によりよく暮らすための狡知を含みながら語った言葉が、今や失われた街や、戦後日本社会の路地裏へと、私たちを誘う」。記録のなかの声に耳を澄ませることで、西井は「復興」という制度の輪郭そのものを揺るがし、都市空間に根を張った生活の実相を静かに浮かび上がらせた。制度の陰でかき消された声に耳を傾ける試みは、語られた復興の物語を足元から問い直すものだ。

仙波希望『**ありふれた〈平和都市〉の解体**』（**以文社**）は、語られなかった声ではなく、語りを不可視化した制度的な構造に焦点を当てる。仙波がとらえる〈平和都市〉とは戦後に新たに打ち立てられた都市像ではなく、むしろ近代都市としての発展を希求してきた広島の、より長期的な都市化の欲望が、戦後の言説や政策に織り込まれたものとして

現れる。つまり、広島は原爆体験に根ざした「平和」の理念により復興した特殊な事例として語られるが、実際には遅れや発展への焦燥といった、近代都市に普遍的な価値観が制度を駆動させていたというのだ。

その視点を凝縮したような事例が「原爆スラム」である。市中心部・相生通りに広がっていたバラック群は、戦後二〇年を経てもなお家を失った人びとの生活の場であった。だが一九六四年に地元紙がこの一帯を「原爆スラム」と名指ししたことで、その空間は突如として焦点化され、「唯一のスラム」として報道・行政・都市政策の標的となる。

仙波が描くのはこうした空間の名づけと再編の力学だ。〈平和都市〉は、被爆を経験しながら都市政策を推し進めた行政関係者の葛藤や、暮らしを守ろうとした人びとの選択によってつくられた。仙波の視座は広島を覆う〈平和〉のベールを解き、原爆ドームや平和公園に象徴される今日の広島に編み込まれた無数の人びとの姿を浮かび上がらせている。

「戦後」は遠い過去でも他人事でもない。日々の風景や身体の記憶に紛れ、私たちのなかに息づいている。その記憶に触れるとき、私たちは、自分もまた戦後という時間の只中にいると気づくだろう。

（たいやき）

新刊コーナー

中動態の世界
意志と責任の考古学
國分功一郎著
新潮文庫

彼が書く本はどうにも面白くて叶わない。現在日本で最も影響力のある哲学者の一人、國分功一郎。彼の近年のテーマである「中動態」について論じる記念碑的著作の文庫版が今春、上梓された。

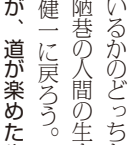
本書の狙いは、能動態／受動態という文法範疇を糸口にして、これまでの哲学が前提としてきた「主体」や「意思」という概念を切り崩すことにある。この試みは前世紀より哲学の共通の使命だったが（フーコーやドゥルーズしかり）、國分はそれに対して中動態という答えをクリアに提示してみせたわけだ。

その論証は國分節がきいており実にスリリング！　今や表舞台から影を潜めている中動態の起源を探るため、國分はギリシア語文法史、或いはアーレントやハイデッガー、ドゥルーズの思想を相手取る。そこで暴かれるのは、する（能動）／される（受動）の図式に我々の認識が支配されてきた歴史だ。中動態の哲学は、従来の自由＝能動＝主体＝意思＝責任の檻から〝自由〟になることを志向する。

さて、単行本版の刊行から五年、本概念はケア論や芸術論など他領域でも受容され、豊かな知的鉱脈を生み出してきた。特に本書と補完的な関係（いわば実践編）にあるのが『〈責任〉の生成　中動態と当事者研究』（新曜社）。脳性まひの当事者・熊谷晋一郎と國分との対談のなかで、臨床現場から立ち現れる〈責任〉が読み解かれる。本書を手に〝自由〟な時間を過ごしてみては。　（浅煎り）

（五二八頁　税込九九〇円　3月刊）

もうすぐ絶滅するという煙草について
ちくま文庫編集部編
ちくま文庫



陋巷にあつた方が道が楽めるといふことに就て、孔子は考えなかつたらしい、

と吉田健一は話しはじめる。だから、孔子だらけの世の中では禁煙も流行るようで、こんな本まで出る始末ときた。

にしても、ここに集められたエッセイをものした諸氏のなんと人間らしいことか！　芥川龍之介が夜半に一服きめれば、佐藤春夫がライターの自慢をし、赤塚不二夫がもらいタバコをねだり、澁澤龍彦はニコチン中毒のあまりパイプが女に見え始め、杉浦日向子が江戸の夜に煙管の雨を降らせる。これが第一部。

第二部は煙草の害について。そのものずばり「煙草の害について」という谷川俊太郎の詩から始まる。曰く、喫煙は、「人間の人間らしさのおろかな証し」だそうである。名誉な称号をいただいたものだ。ところで、あの、煙草の有害さについて語る喫煙者たちの、あの、飄々としたような、いや、少し屈折したような、あの感じ、これが人間で、人間の愚かさというものだよね、と一人合点する。

で、第三部。禁煙について。タイトルをぎっと見てみるとそこにあるのは、「禁煙の快楽」、「禁煙免許皆伝」云々…。つまり、辞める気がないか、辞めた後も煙草のことばかり考えているかのどっちかだ。いずれにせよ哀愁漂う陋巷の人間の生き様というものだ。

吉田健一に戻ろう。曰く、**「陋巷にあつた時の方が、道が楽めたやうな気がする。その方が煙草は確かに旨い」**らしい。どうりで旨いと思った。ありがたいことに！　ではまた、喫煙所で会いましょう。　（コーク）

（二四〇頁　税込八八〇円　5月刊）

春のこわいもの

川上未映子著
新潮文庫

あの春を思いだせるだろうか。新型のウイルスが猛威を振るい始めた、あの春。ニュースは連日感染者数を伝え、それでもまだ、その数字がどこか他人事のように感じられたころ。そんなことよりもだいじなものがあったころ。

それは人によってさまざまで、たとえば整形だったり、なくした手紙だったり、二十年ぶりにかかってきた電話だったりする。ここに収められた〝コロナ前夜〟の六つの物語は、それぞれ主人公の立場も年齢もちがっていて、交わることはない。それでもこの短編集をつらぬくものがあるとしたら、それはにじりよってくるような不穏さだ。存在することとしないことの曖昧な境界線。たしかにそこにあるはずのものが、どうしても掴みきれないときの、心のざわめき。まるで春の穏やかな陽光から、冷えびえした夜を嗅ぎとるような。

「この奇妙に青くて明るい、僕のデッサン室で何が起きたとしても、それは、どこにも残らないんじゃないんだろうか。そもそも出来事が起きたと決めるのは、いったい誰で、何がそう決めるのだ？　僕たちがここにいることを誰も知らず、誰にも知られていないこの場所で今、起きることなんて、結局のところ、世界のどこにも残らないんじゃないだろうか？」

あの春はどこへ行ってしまったんだろう。五年のときが経って、みんな、何事もなかったかのように日常へ帰っていく。この物語は、そんな人たちの肩をとんと叩く――わたし、忘れたことないからね。　（くたくた）

（二二四頁　税込六〇五円　3月刊）

美しい世界はどこに

サリー・ルーニー著
山﨑まどか訳
早川書房

主人公で小説家のアリスはこう言う。

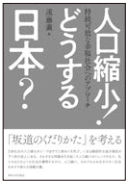
「現代の（…）小説の問題は、この世界の多くの人々が生きている現実を締め出」していることで、「『普通の生活』を美しく描いたささやかな小説」は、「世界の真実に蓋をする」ための「きらびやかな文章の上っ面」で、そして、自分はその「最悪の罪人」のひとりなのだと。たしかに、「美しい世界」を求めて僕らが周りを見渡したとしても、そこにあるのはチャット、マッチングアプリ、SNS、気候変動、プラスチック汚染、反出生主義、抗うつ剤、心療内科、そんなものばかり。日常の劣化と世界の危機、そしてこの二つの癒しがたい乖離。現実は文学から離れていく一方にみえる。

この問題――世界と小説の間の不調和――へのひとつの回答が、『美しい世界はどこに』だ。本書は性質の異なる二つのパートを交互に配置することでこの困難に立ち向かおうとする。一つ目は三人称で主人公とその周りの人々の（恋愛、金銭、親子関係の）悩み多き生活を描く部分。もう一つのパートはアリスと親友のアイリーンがメールで交わす抽象的な議論の引用。具象と抽象を行き来する構成によって、日常と世界の両方が、ひとつの小説の中に捕えられる。

二十世紀中盤以降、かつての「全体小説」の不可能性が囁かれて久しい。しかし著者は、確かにそこにある僕たちの世界から目を離さないことを選んで、現代の「全体小説」への第一歩を踏み出したのだ。ここに、文学の、世界への、反撃の狼煙が昇った。　（コーク）

（三八四頁　税込二九七〇円　2月刊）

人口縮小！どうする日本？
持続可能な幸福社会へのアプローチ
遠藤薫編　東京大学出版会



大学業界の先はもう長くはない。子どもの数が圧倒的に減っているのだから。ただあぐらをかくばかりではまず潰れるだろう……ともすればそんな二〇二五年だ。

さて、本書は〝現代の人口問題を、「人口の総減」というよりも、人びとにとって「幸福な社会」の実現という視点〟から考える。つまりは人を増やそうとするのではなくて、人口減少を既定路線として受け止めた上でいかに軟着陸するかを論じたものだ。

各界の専門家らによるオムニバス的著作となっており、各章は短く読みやすい。前半部では人口減少の構造的背景が社会科学の知見より俯瞰される――なかでも〝いまだに「伝統的家族」イメージに囚われ、社会の多様化や複雑化に対応できずにきた日本政府の問題〟を喝破する伊藤論考は傾聴に値する（人口減少ゆえに生じる不安を安易に排外主義・差別主義へと転化・扇動させる某政党には、ぜひ本書の知見を頭に叩き込んでもらいたい）。

そして後半部では医療・技術の視点から具体的な対応策が展望される。例えば生殖医療や高齢者医療、またはモビリティ技術の運用など。正直に述べれば、こちらは些か論点が散漫とした印象を受ける。医療・技術を貫く総合的な提言が示されなかったのはやや残念ではあった。オムニバスゆえの難しさか。

ともあれ、学術知をキャッチーに伝えんとする本書の意図を踏まえれば、博士課程の院生からの難癖も大した瑕疵にはなるまい。反動でも悲観でもないかたちで人口減少社会の未来を考えるよすがとなるだろう。（浅煎り）

（三一二頁　税込三一九〇円　4月刊）

選抜検査史
まだ見ぬ組織行動へ
鈴木智之著
中央経済グループパブリッシング

就職活動を経験した人はその殆どがエントリーシートを書き、適性検査を受けたことであろう。志望動機、強み弱み、学生時代に力を入れたことなどの作文をした後、適性検査として算数国語の問題や性格アンケートに臨む。何の意味があるのかと思いながらやっていた思い出がよみがえる。本書ではこの二つの選抜方法の研究史をレビューし、その意義を検討する。

適性検査については性格検査に注目し、現代までの主要研究が詳説される。性格という捉えがたいものを測定することは容易ではない。人間のパーソナリティ特性がどう分類できるか、それが仕事のパフォーマンスにどう結びつくか。理論の提唱から検証に至るまで、研究者の試行錯誤の歴史が描かれている。

エントリーシートによる選考も当然困難である。そもそも文章は人間の何をあらわし、そこからどんなことを測定・理解できるのかを考えなければならない。こちらも様々な文章評価研究が解説され、文章による判別の有効性と課題が示されている。

非対面型の選抜方法だが、意外にもそれらは人材理解に一定の貢献をしていたのだ。とはいえやはり因果関係だったり他変数の影響だったりで限界はあり、模索は続いている。エントリーシートも適性検査も企業によってその形式・内容はバラバラだが、なるほど正解がはっきりと分かっていない中で企業も試行錯誤していたのだ。私の就活は苦い思い出が多かったが、就活前に本書に出会えていれば、少しは楽しめただろうか。（竹輪）

（二四〇頁　税込二八六〇円　6月刊）

クィア・レヴィナス

古怒田望人／いりや著
青土社

ことわっておくが、私は哲学の研究者でも、クィア理論にかるいわけでもない。それでも、自身の実存と正面から向き合った研究、その集大成としての博論本の持つ真摯さには、胸を打たれる思いがした。

レヴィナスに「女性的なもの」「繁殖性」という概念がある。そこでは、自己へと自閉する構造（＝「孤独」）の問題を解消するために「息子」（＝「他者でありながらも、私であるような未知の者」）が提示され、「女性的なもの」は受動的な他者として描かれる。家父長的な生殖を特権化する異性愛・シスジェンダー中心主義を前提としたこの理論は、クィアな人々の存在を抹消する。

にもかかわらず、ジェンダークィアとして生きる著者は、規範にまみれたレヴィナスの思想に惹かれた。著者曰く、そのテクストは〈ストレート〉な読解を逸脱する裂け目に――クィア・リーディングの魅力に満ちている。たとえば「皮膚」を論じた部分。一般に「差異」の哲学として知られ、他者との暴力的な関係性を提示するレヴィナスの哲学から、〈同質性〉――皮膚を通じた自他の混ざり合いが導き出される。テクストの意図に〈逆らって〉その理論を解釈すること、そしてその哲学をクィアな人々にもアクセス可能なものとして開くこと、それが本書の目的である。

だからこそ、本書の記述はレヴィナスやクィア・リーディングに親しくない読者にも開かれている。異質な他者と対立するのではなく、〈同質性〉によって繋がるためのヒントが、本書には記されている。　（くたくた）

（二五六頁　税込二八六〇円　3月刊）

非二元的な性を生きる
性的マイノリティのカテゴリー運用史

武内今日子著　明石書店

ノンバイナリーやXジェンダーといったことばを聞いたことがあるだろうか？どちらも「男／女」の区分にあてはまらない／あてはめない性のあり方を表す語である。このような概念はどのようにしてうまれ、用いられてきたのだろうか。こうした問いに応えたのが本書である。

筆者は、「Xジェンダー」や「トランスジェンダー」といった概念を、〝ジェンダー非順応な人びと〟を包括し表すために用いられる「カテゴリー」としてとらえる。また、これらのカテゴリーが時間とともに変化し、用いられる様を描き出す。

たとえば、「男」「女」というふたつのカテゴリーが自明視されていた時期には、トランスジェンダーのコミュニティにおいて「男から女」、「女から男」へと性別を変えることが強く支持されていた。このような状況に違和感を表明するかたちで、Xジェンダーなどの非二元的なカテゴリーが用いられるようになる。しかし一方で、Xジェンダーを「便宜的」に用いたり、「煮え切らない」語と認識するような実践も存在した。当人たちの独自な意味づけを尊重するこのような規範は、カテゴリーの定義をめぐる揺らぎやコンフリクトを生む。

カテゴリーは過去の経験を解釈しなおす手がかりとなるが、カテゴライズが困難を生むこともある。本書で描かれるさまざまな実践は、そのような困難を生き抜くためのヒントとなるかもしれない。

（投稿・ぴよちゃん）

（三六〇頁　税込三六〇〇円　3月刊）

ライオンの場所
チャールズ・ウィリアムズ著　横山茂雄訳　国書刊行会

ロンドン近郊のハーフォードシャーで、一頭の雌ライオンが見世物小屋から脱走した！　しかしアンソニーらが遭遇したのは、件の雌ライオンと、いるはずのないとてつもなく巨大な雄ライオン。そしてそれは、すべての始まりにすぎなかった。王冠を戴く蛇、無数に羽ばたく蝶の大群と宙空に飛翔する主たる巨大な蝶……ライオンの出現を皮切りに、アンソニーらの前にこの世のものならざる異形の〈天使〉たちが次々と姿を現わす。

物質世界のなかに突如として顕現し始めたのは、あらゆる存在の始原たる形而上的世界、実在の根源である〈本源的形相（プリンシプル）〉の世界である。謎の導師の手によってその世界の〈力〉は今や猛威を振るい、経験的世界の獣たちをイデアの似姿へと変貌させつつある。そしてこの世界もまた、彼方の世界へと移行しつつあるのだ。――要するにこの小説を一言で表すなら（そんなことは不可能なのだが）、神学と神秘主義が交錯した超越的世界の幻視、その魔術的現前ということになろうか。

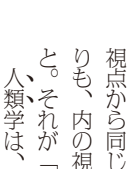
とはいえ、チャールズ・ウィリアムズの作品は単なるオカルティズム小説などではない。観念的世界の幻視を退屈な抽象的思弁に留めてしまうことなく、それを描き出す筆致にある。ウィリアムズの幻視（ヴィジョン）は、圧倒的な〈力〉とともに、読者の眼前にも展開するのである。〈彼にとって物質界と霊界とに国境はなかった〉とTSエリオットは言う。これこそ幻想小説の極致といえるのではなかろうか。

同著者の『天界の戦い』（扶桑社）も本作と同時期に邦訳刊行された。「超自然的スリラー」の世界に浸る、絶好の機会だ。（猫足）

（三一〇頁　税込三〇八〇円　4月刊）

内在的多様性批判
ポストモダン人類学から存在論的転回へ
久保明教著　作品社

そもそも人類学とは変な名前ではないか。あらゆる学問は根本的には人類に関わるのだから、それは「商品屋さん」を名乗る店のようなものだ。しかし、ここで人類と言われているものは一体何なのか？　私たちは、本当に一つの同じ人類の話をしているのだろうか？　いや、そもそも私たちは一つの同じ人類なのだろうか？



本書は人類学の学説史という体裁をとりながら、この重厚な問いをひたすら詰めていく。次々に繰り出される過去百年間の人類学者と、その有名・無名な理論たち。単線的な人類学史の記述では乗り越えられた（とされる）古い理論をもう一度拾い上げ、ひたすら精読し、時には大胆に後続の議論との類似点を見出す。そこで気づかされるのは、人類学はずっと、冒頭に掲げた問いをめぐって思考してきたのではないか？　ということだ。

人類学者はいつも悩んできた。自分の調査する民族の文化が人類に同じく共通するのか、それともその民族特有のものか。同じだと言い切ればわざわざ辺境まで行く理由がないし、そうでない（普遍化できない）なら調査する理由がない。むしろ重要なのは、別々の民族の文化が互いに似ているということだ。外の視点から同じ（でない）ものだと判断するよりも、内の視点から似ている理由を考えること。それが「内在的多様性」に他ならない。

人類学は、確かに変な名前ではある。しかし変な名前だからこそ、人類という概念を批判的に主題化することもできる。人類学がやるべきことはまだまだ山積みだ。（倉井）

（三二八頁　税込二九七〇円　6月刊）

町の本屋はいかにしてつぶれてきたか
知られざる戦後書店抗争史
飯田一史著　平凡社新書

二〇二五年現在、書店の未来は明るいとは言えない。Amazonの台頭、電子書籍の普及。しかしながら、「町の本屋」はずっと前から潰れてきた。本書は出版業界が抱える構造的問題、歴史的経緯を、当時の資料を基に「町の本屋」（地元の中小書店）の側から暴く。

そもそもの問題として、書籍は優秀な商品ではない。粗利率は低く（25％弱）、基本的に書店が値段を自由に決定できない。運送コストもかかれば、売り上げ予測も難しい（同じ食品を何度も買う人はいても、本では稀だ）。

出版社や出版取次との関係において、書店の置かれている立場は弱い。さらに時代の変化に合わせて様々な商売敵（駅の売店、コンビニ、Amazon等々）が登場し、経営を脅かしてきた。今や「町の本屋」はすっかり減り、本屋といえば大手資本の大型書店が主だ。

暗い未来の先で、「町の本屋」はどのような道を辿るのか――。それでも、我々が本を読むという営みを止めない限り、光明はあると信じたい。評者が本書を手にとった、小さな書店を思い返しながら。（荒砥）

（三五二頁　税込一三二〇円　4月刊）

誘拐された西欧、あるいは中欧の悲劇
ミラン・クンデラ著
阿部賢一訳　集英社新書

東欧と西欧。両者を隔てる基準は、政治と文化によって異なってくる。旧共産圏に含まれていたとしても、文化面では西欧に由来を持つ諸国――ハンガリーやチェコスロバキア、ポーランドといった地域は、いわば共産主義によって誘拐された西欧であり、これらをまとめてミラン・クンデラは「中欧」と呼んだ。本書は彼が生前発表して爆発的な影響を持った「中欧」論である表題作に、関連する演説「文学と小民族」を収めた一冊である。

中欧――東西どちらにとっても周縁だったこの地域は、歴史上数多の脅威に晒された。けれども抑圧に対する抵抗によって《文化の生気はむしろ強度と激しさを増し、文化は人々が集う生命力を帯びた価値となる》とクンデラは云う。そうして育まれた豊かな芸術は、ヨーロッパの文化的中心を担ってきた。

しかし現代、文化の価値は見失われつつある。中欧の文化が失われる時――それはヨーロッパの文化が失われる時だ。クンデラの議論は、故郷チェコだけでなく、欧州全体をもその射程に含めているのである。（水炊き）

（一六〇頁　税込一〇四五円　4月刊）

ネオ・ユーラシア主義
「混迷の大国」ロシアの思想
浜由樹子著　河出新書

本書は、ロシア現代思想のひとつ、ネオ・ユーラシア主義に関する本邦初の概説書だ。ユーラシア主義は、ロシア一帯をヨーロッパでもアジアでもない独自の文化圏として捉え、非西欧的な国家体制を目指す政治思想である。この思想自体は一八世紀から脈々と続くが、特にソ連崩壊以降のロシアでは、共産主義国家に代わる新たな国家像の創造が求められた。それがネオ・ユーラシア主義である。

本書は、特に有名なアレクサンドル・ドゥーギンだけでなく、私たちの知らないネオ・ユーラシア主義者たちの世界を披露してくれる。パナーリン、チタレンコ、グラジエフなど、日本では無名に近い危険思想家を、彼らのロシア語原典を参照しつつひとわたり解説するなど、充実度はかなり高い。

一方で、ネオ・ユーラシア主義という危険思想を、隣国の他人事だと一蹴するのは早計だろう。東亜新秩序や大アジア主義を挙げるまでもなく、率先して「盟主」の役回りを引き受けたがる事例に事欠かない近代日本思想を再考する手がかりにもなりうる。（倉井）

（二八〇頁　税込一三二〇円　6月刊）

生き続ける神話――女たちの叙事詩

『ギリシア神話』を冠した書籍は多数存在する。しかし、それらは叙事詩や悲劇など、さまざまな作品に登場する神話をまとめ直したものに過ぎない。古代にギリシア神話の聖典は存在しなかった。

それでも強いて聖典なるものをあげるとすれば、それはホメロスの『イリアス』『オデュッセイア』である。しかしそこで語られるのは、ほとんど男性英雄たちの営みに限られる。

◆怒りを歌え、女神よ、ペレウスの子アキレウスの

『イリアス』はトロイア戦争の一部始終、ギリシア随一の英雄アキレウスの怒りを主題とした叙事詩である。怒りの原因はギリシア方の総大将アガメムノンとの仲違いであった。そしてその発端となったのは――アキレウスの女奴隷ブリセイスをアガメムノンが奪ったことであった。トロイア戦争の発端と同じように、『イリアス』も一人の女性をめぐる諍いから始まる。

『女たちの沈黙』（早川書房）で著者バーカーは『イリアス』をブリセイスの視点から語り直す。彼女らは人間としてではなく各将の持ち物として、労働力として扱われる。奴隷である彼女らはギリシア軍における公的な空間の中においては、徹底的に透明な存在としてある。そんな彼女らの目に映るアキレウスら英雄たちは、必ずしも戦場で華々しい活躍をするだけの存在ではない。時には弱々しく幼い人間である。確かに叙事詩の中でも、神々の定めた残酷な運命が英雄たちを襲う。しかしながら、その陰にいる女性たち――親類を虐殺した男たちに奴隷として仕えなければいけない彼女らが被る運命はより一層悲惨なものである。

◆男のことを私に語れ、ムーサよ、知略に富んだ男のことを

『オデュッセイア』はトロイア戦争に勝利したのち、十年もの月日をかけて故国に帰る英雄オデュッセウスの冒険譚である。彼が故郷を離れている間、妻のペネロペイアは若い息子テレマコスに代わって家を切り盛りし、オデュッセウスが死んだと考えている財産目当ての求婚者たちの誘いを躱す。そして帰還したオデュッセウスは求婚者たちを惨殺し、彼らに与していた侍女たちも処刑される。

『ペネロピアド　女たちのオデュッセイア』（角川文庫）で著者アトウッドが焦点を当てるのは、表題が示すようにペネロペイアと、処刑された十二人の侍女たちである。彼女らの処刑のシーンの解釈をめぐっては、研究者たちの間でも意見が分かれている。本書では「現在」冥府にいるペネロペイアの視点から求婚者たちの惨殺、そして侍女たちの処刑が捉え直されることになる。『オデュッセイア』においてテレマコスが「語ることは男の関心ごと」と言うように、女性の声が表だって語られることはない。本書はそんな彼女らの語られることのなかった声を掬い上げていく。

ホメロスは聖典に近しいものとしてあり続けていた。しかし、そこに描かれている内容を捉え直し、変奏させることは古代から行われてきた。更にそうした営みは現代においても開かれたものである。語られ続ける限り、神話は生き続けるのである。

（荒砥）

幽霊小説アンソロジーへの招待（英米編）

一九世紀のイギリスは、幽霊小説の黄金時代だ。近代小説の発展とともに幾多の書き手たちがこぞって「幽霊」にまつわる物語を紡ぎ、豊饒な文学空間を生成していたのである。それは単なる好事家の趣味や迷信への好奇などではなく、確たる文学的営為として展開していた。ここでは、最近刊行されたアンソロジーを取り上げつつ、そんなゴースト・ストーリーの世界を紹介しよう。

『**ロンドン幽霊譚傑作集**』（創元推理文庫）に収められた諸作品が描き出すのは、ヴィクトリア朝ロンドンの都市生活のなかでなされる幽霊との邂逅だ。産業革命による都市化と合理主義の時代、日常の暗がりに息を潜めた幽霊は、合理的世界に揺らぎを与えるようにして近代人の前にその姿を現わす。「C――ストリートの旅籠」の語り手は云う、〈わたしは幽霊を信じているわけではない（…）だがその一方で、現世的な普通の感覚もまた信じきれない場合がある〉――理性と超自然との間で揺れ動きながら、登場人物たちは幽霊について語り合う。そこに浮かび上がるのは生者の意識、経験的世界とは薄皮一枚隔てた先にある、彼岸の世界への眼差しである。

『**淑やかな悪夢**』（創元推理文庫）は、英米の女性作家の手になる怪奇小説の小品を集めた名アンソロジーだ。ゴースト・ストーリーには優れた女性の書き手も多く、本書ではその様子を窺い知ることができる。古典的作品であるギルマン「黄色い壁紙」では、抑圧された女性の意識が狂気と怪奇のはざまで不安定に語られる。その他、亡き妻の幽霊との性愛を描く「証拠の性質」をはじめ、ここに収められたのは人間心理への深い眼差しが幽霊譚と絡み合った珠玉の作品群だ。

ところで話は逸れるが、英米圏の怪奇小説の広大な世界は、明治・大正時代には早くも日本で知られていた。『**芥川龍之介選　英米怪奇・幻想譚**』（岩波文庫）は、旧制高校の学生向けに芥川の編んだ英語小説アンソロジーから、幽霊譚を抜粋して新訳したものである。ワイルドやウェルズといった誰もが知る作家から、その方面ではお馴染みの怪奇小説作家まで揃っていて、絶好の入門書といってよいだろう。

＊

なぜこんなにも幽霊は「語られる」のだろうか。幽霊とは、則ち死者である。より正確には、死者に対する私たち生者の眼差しである、と云うことはできないか。私たちは死者に逢うことは決してできない。彼らは死者である時点で、過去にしか存在しえないものだから。絶対的な完了体として死は――死者は存在する。だから死者とは、ひとえに私たち生者のなかにしか生きられないものだ。生者なき処に死者はいない。裏を返せば、幽霊は生者の語りによってこそ生命を持つのである。恐れ、悔恨、郷愁、愛憎、抑圧、疎外……幽霊についての語りのなかで、生者は彼らに様々なものを託す。死者に対する生者の眼差し、それこそがゴースト・ストーリーの原理機構にほかならない。生者と死者とが交錯する、不合理な語りの織物（テクスト）。ゴースト・ストーリーとは、そのような語りを通して、彼岸に佇む誰かの影を追い求める私たちの祈りなのだ。（猫足）

編集後記

この春から、オーディオブックを聴くようになりました。以前こそ、本は「読む」ことが大事なんだ、音声だけでは頭に入らない、と思っていましたが、なかなかどうして「読む」のと遜色ありません。

オーディオブックの面白さは大きく二つ、多声性と線条性にまとめられるでしょう。前者は文字通り「声」が響くことの面白さです。自分のものではない声で読み上げられ、小説ならば台詞のひとつひとつが読み分けられる。同じ作者の本でも、朗読者によって味わいが変わる。たとえば村上春樹の「やれやれ」は、読む人によって別のニュアンスを持っています。これは実に新鮮な体験です。

もうひとつは、要するに最初から最後まで順番に読み上げられることの効果です。一言一句拾われることで、眼でページを眺めるときには読み落としたような細部に気づくことができる。何よりまた、朗読は止まることなく、いつか終わります。たとえそれがどんなに長大な文章であっても、ときに退屈でさえあっても、読書は継続されるわけです。このおかげで、以前なら躊躇っていた大長篇にも気軽に手を出せるようになりました。

そんなわけで、いまではすっかり生活の一部。みなさんもいかがでしょう？　（水炊き）

当てよう！ 図書カード

今回の特集は戦後。日本の戦後といえば、米国から輸入されてきたエンタメ＝プロレスが一躍お茶の間の人気を博した時代でもあります。1954 年 2 月に日テレで放送され、プロレスブームを巻き起こした伝説的な試合で、力道山・木村政彦の相手をしたのは誰？

1. ハロルド坂田　2. ザ・デストロイヤー
3. シャープ兄弟　4. ハルク・ホーガン

（倉井）

《応募方法》　答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記 QR コードのリンク先（https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7）から応募することも可能です。正解者の中から 5 名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは 9 月 15 日です。

《5 月号の解答》　5 月号の問題の正解は、4. のプリツカー賞でした。ちなみに、「数学のノーベル賞」はアーベル賞。京大の柏原正樹特任教授が受賞され、日本人初の快挙となりました。図書カードの当選者は、ペンタスさん、いいみょんさん、天プラそば大盛りさん、いわさん、京都にてさんの 5 名です。当選おめでとうございます。　（くたくた）

読者からひとこと

○雨の日に読みたい本を知りたいです。（はば）

○読むだけで生きる力がわく本を紹介して下さい（笑）（天プラそば大盛り）

――梅雨のじめじめした暑さがやっと身を潜めたと思ったら、連日の猛暑……ただ生きているだけでも体力を使う日々ですね。本の世界に逃避したいものです。残念ながら私は炎天下で川端康成の『雪国』を読んでも全く没入できませんでした……。「こんなときこそこれ！」というオススメの本があれば、読者カードでぜひぜひ教えてください！

○特集「大阪」はなんとなく知っているつもりのことから更に踏み込んだ内容の紹介が多く、全部読みたくなりました。近くてよく行く場所でも土地や町や住む人や歴史についてまだまだ知っていけることが多く大阪以外の京都や宇治や桂についても知りたくなりました。（防災研・ペンタス）

――知っているつもりの土地の知らない一面が本を通して浮かび上がるのは面白いですよね。今月号の特集でも、平和都市・広島の見えにくい歴史が取り上げられています。終戦八〇年の節目にぜひ。（くたくた）